

『江談抄』吉備大臣入唐譚の意味するもの

——大江家学の始祖説話——

善養寺 淳 一

はじめに

院政期の鴻儒大江匡房（一〇四一―一一一一）は、晩年に自らの談話を筆録させた言談『江談抄』を残している。その内容は長短様々な故事や詩話であるが、第三「雑事」（一）「吉備入唐の間の事」¹には、長文の吉備真備の入唐説話が収載されている。『江談抄』には、匡房最晩年頃の作とされているが、そこには匡房の多様な関心事が綴られており、吉備入唐譚の解説により匡房の諸思想の断面が垣間見えてくる。この吉備大臣説話が内包する問題は意外に奥深く、説話の諸要素を検討することで、その意味を明らかにし、匡房がそこに何を意図して語っているのか、という点を明らかにしてみたいと思う。この説話では、吉備大臣が将来したとされる文物³が取り上げられ、これらが説話の柱となっているが、史実に合わないものが多い。博覧強記の碩学、匡房の話としては不審の感を免れない。私見ではそこに問題が存し、匡房の言説は史実を基としながらも、それとは別の「何か」を語っているのではないかと考える。この「何

か」は大江の家学に関わるものであると思う。

本稿では試論として、「吉備入唐の間の事」の粗筋にそってその構成要素について先行研究をふまえて検討を行い、これら諸要素が説話中でのどのような意味を持つのか、また匡房の意図は何かという点につき考察し、吉備大臣入唐譚全体の意味を解明したいと思う。

一、「吉備入唐の間の事」の粗筋と構成要素

まず「吉備入唐の間の事」の要約を掲げておきたい。

吉備大臣は唐に渡った後、その学識に恐れをなした唐人により、楼に幽閉されてしまう。唐人達は真備の学才を試そうと様々な難題を課するのであるが、鬼と化した阿倍仲麻呂の霊の助けや、本朝の仏神の靈験により、これらの難題を解いて唐人に勝つという粗筋である。

次に、「吉備入唐の間の事」の構成要素を粗筋にそって列挙すると、次のとおりである。

(段落は新日本古典文学大系32『江談抄』の段落である。)

①鬼の出現(第1段)と援助(第2・3・4・5段)

②『文選』の試問(第3段)

③唐人との囲碁戦(第4段)

④野馬台詩の解説(第5段)

⑤吉備説話の伝承(第6段)

右の①から④が説話の構成要素と見做される部分であり、⑤は匡房がこの吉備説話は、故橘孝親朝臣(匡房の外祖父)が先祖から語り伝えられたとする伝承の系譜である。以下、右の①から④の入唐譚の各構成要素の意味の検討を行い、その後⑤の言談に言及したい。

二、鬼の出現と援助

「吉備入唐の間の事」の冒頭部分では、渡唐した吉備大臣が、唐人の画策により、楼に幽閉されてしまう。鬼が棲む楼は、この説話の舞台設定であるが、そこに登場するのが、鬼と化した阿倍仲麻呂の霊である。鬼の出現に対し動じることなく毅然とした対応を見せた吉備大臣は、鬼の要請に応じて阿倍氏の子孫の動静を語ったことで、この国での鬼の援助を得られることになる。以後、鬼は吉備大臣に課される難問の解決を助ける存在となる。重要な点は鬼と吉備大臣との結び付きという事であろう。鬼が吉備大臣と共に登場する話にはどのようなものがあるのか、この点に関して興味深い史料を次に二つ掲げておきたい。

一つ目は、小峯和明氏が指摘されたもので、台秘密法の書である『阿婆縛抄』第八十六「六字河臨法」^⑤に、吉備大臣と共に鬼が登場する部分があるので、次に引用しておく。

(前文略) 吉備大臣大唐記爲隆國卿記二兩本引勘無其事。昔悲母讀聞也。其文言云。大臣於大唐乘鬼夜行之間。件祓燒鈎利鈎以打放。コトノコトク云所燒鈎多、出飛合タリケレバ。鬼キラ

レヌヘクテニケニケリ。大臣件語聞自始件所書付置タリケリ。

明朝唐人等來見後其正文授大臣云、(後文略)「傍線引用者」右の「六字河臨法」に見える吉備大臣の話は、「中臣祓事」の説明として引かれ、天台密教の修法書に神道の祓(点線部)が入っている。この部分は、大唐に於いて「乗鬼夜行之間。件祓燒鈎利鈎以打放。」という伝奇的要素を含むものである。

この伝承の成立については、岡田健太氏の「『阿婆縛抄』研究史稿」^⑥に拠れば、近年の説である尊澄撰者説とした場合、同書の成立年代以前、即ち仁治二年(一二四二)以前の時期と推測される。しかし、『江談抄』の真備説話との関係は不明とするほかない。

二つ目は安倍氏系図注記(壬生本『医陰系図』所収)^⑦である。

この注記は、著名な陰陽師安倍晴明の先祖の安倍倉橋麻呂の注記である。「傍線引用者」倉橋麻呂は、阿倍仲麻呂(注記では仲麿、或いは仲丸とする)の先祖ではないが、同系図の倉橋麻呂の注記に「一名仲麿」とあることから、附会されたものであろう。

或記曰、仲麿者榮惑分身也、降和国輔王道、到異国能天文陰陽、異朝人怖惡之、令禁圍而遂殺之、仍爲靈鬼伏人、吉備磨渡唐之時見異形教授天文・曆術・算計・儒書令来朝云々、仍仲丸

孫葉等猶達天文伝其業云々、依之吉備来朝天文術伝当流乎、

この注記を持つ壬生本安倍氏系図本文は、「十五世紀後半に作成された可能性が考えられる」とされるが、その内容は吉備入唐譚同様の渡唐譚であり、また、伝奇的要素も幾つか重なる点（傍線部の吉備渡唐時に仲麿が異形（靈鬼）となり姿を現わす）が見られる。仲麻呂は真備と同時期に入唐し、真備は初期の陰陽道家であり、一方注記によれば、仲麻呂は、異国に到り天文陰陽を能くした、とする各要素の重なりは重視すべきものである。

それにしても、吉備大臣の話に何故鬼が登場するのだろうか。この点を解き明かすには、吉備大臣と鬼との関係に注目すべきである。『江談抄』の説話では、冒頭、鬼は吉備大臣が幽閉された楼に現れるが、大臣は「隠身の封」（陰陽道の呪術）で自分の姿を隠してしまう。大臣は鬼の姿を叱責し、鬼はこれに従い衣冠を着けて再度対面する。この大臣の振舞いは、鬼をも恐れず、これを自在に動かし得る力を持っていることを暗示している。

鬼との対談により、鬼は阿倍仲麻呂の霊であることが明かされ、これ以後、鬼は常に大臣と行動を共にし懸命に支援を行う。具体的には唐人側の動静を察知し、大臣に情報提供を行い、唐人の謀略にどう対処すべきかという作戦を練り、囲碁戦勝利の後には、怒った唐人によって食糧を断られた大臣に食物を運ぶ援助を行う。このような吉備大臣と鬼との関係は、陰陽師と式神（陰陽道で使役する鬼神）との関係と何等変わるところがない。

式神の正体については、鈴木一馨氏の『宇治拾遺物語』巻第二「清明藏人少將封する事」¹¹に関する考察がある。それに拠れば、「式

神というのは、陰陽師が六壬式占^{りくじんちくせん}によって怪異の背景にある意思を探ることから、その六壬式占による推断の能力を人格化して生み出した存在と考えられるのである。」とし、「式神というのはそこにおける呪力の運搬役としてはたらくことになり、世上では怪異となつて現象化するのである。」としている。

この図式を『江談抄』の吉備大臣と仲麻呂の霊鬼との関係に当て嵌めれば、吉備大臣が窮地に陥った際に、仲麻呂の霊鬼は大臣の発する呪力を運搬し、その実現に向けて働く存在である事と重なる。仲麻呂の霊鬼は、『吉備大臣入唐絵詞』で異形の鬼に描かれ、また、式神が鬼の外形を持つ点については、『不動利益縁起絵巻』の式神の姿（注（10）参照）に明らかである。鈴木氏の見解からは、仲麻呂の霊鬼も、外形だけでなく実質的にも式神の役割と考えられる。右の考察から、仲麻呂の霊鬼を使役する真備には、彼が隠身の封を用いたということからしても、或いは、式神を使役する陰陽師としてのイメージがあるとも考えられるのではないだろうか。要するに、この話の冒頭には、陰陽道の大家としての吉備大臣と、その式神を思わせる鬼が登場したということになる。阿倍仲麻呂が吉備大臣と共に養老元年（七一七）入唐しているという史実¹³を考え合わせれば、両者を取り合わせた『江談抄』のような説話化はごく自然なものと考えられる。

また上述のとおり『江談抄』に於いて陰陽道の大家とされた吉備大臣は、平安後期成立とされ匡房撰者説¹⁴もある『扶桑略記』に於いても「陰陽」を修めた者とされ、本邦陰陽道の始祖とされているのである。『扶桑略記』でも『江談抄』に見られる吉備大臣を陰陽道

と結び付ける大江家学の始祖説話への志向が胚胎していると考えることが出来るだろう。

ここまで述べてきた陰陽師(家)としての吉備大臣という側面のほかにも、非常に興味深いことは、今井宇三郎氏が、日本の易学に関する解説で、禅僧の柏舟宋趙(二四一六―一四九五)が、足利学校で受講した易学講述の記録『周易要事記』のうちの、本邦の「倭点」(訓点)につき、次のように紹介している点である。(傍線引用者)

凡易経倭点ト云ヘトモ先江家菅家ノ二点アリ、江家ハ吉備大臣家ナリ、菅家ハ北野君家ナリ、京師ノ諸儒ハ或江家ノ点モアリ或菅家ノ点モアリ、(以下略)

この記録から、柏舟の生きた中世に於いて、吉備大臣は大江の家学の始祖とされていたことがわかる。この点を、前述の吉備大臣の式神を操る程の陰陽家としての力量と結び付けて解釈するなら、吉備大臣が『江談抄』の説話に登場する理由は、優れた学者にして陰陽道の大家でもある吉備大臣は、匡房の陰陽道等の不可思議、怪奇的なものへの傾斜、という興味、関心に一致しているからである、という事を示すものと考えられる。

この説話の冒頭に置かれた、[1]鬼の出現と援助(第2―5段とこの話全てに及ぶ)は、実は呪術を行い鬼と対話し、これを式神の如く使役する陰陽道の大家としての吉備大臣(後世、大臣は大江氏の学へ繋がる始祖とされ、その陰陽道の「バイブル」は、後述の『易経』¹⁷)である)の抜群の力を示す出発点と考えられる。

三、『文選』の試問

吉備大臣に最初に課された難問は『文選』を読まされるというものであった。吉備大臣は鬼の助けにより、『文選』の講義所へと飛行し、そこで儒者の講義を聞き、また勅使を欺き『文選』を借用して、この結果『文選』は日本にもたらされた、という話が語られる。

『文選』が吉備大臣により日本に将来されたという話は、史実に照らせばおかしな話である。『文選』の将来については、時期の確定はできないものの、おそらく小野妹子の遣隋使によって齎された可能性が高いと言われるが、そうであるなら真備生誕(六九五年)以前の、推古天皇の時代(小野妹子の派遣は六〇七年である)という事になる。更に、『考課令』¹⁸第十四72(「進士条」¹⁹)には次の条文がある。

凡そ進士は、試みむこと、時務の策二条。帖して読まむ所は、文選の上帙に七帖、爾雅に三帖。(以下略)

また匡房は、『文選』卷五十三、李康「運命論」²⁰について、「弁運命論」(『本朝統文料』²¹卷十一)を書いているが、この漢故事の受容については、山田尚子氏が詳細に論じている。²²

更に、佐藤道生氏によれば、平安時代半ば過ぎ頃より、文章経国思想の衰退による漢学の停滞と、『白氏文集』の盛行という要因から、院政期には紀伝道(文章道)の必須科目といえる文選学が衰退し、『文選』を巡る危機的状况があったとされる。このような状況

の中で、匡房は文選学復興に尽力し、『文選』語重視の作品を作っているのである。²³

右の両氏の論考をふまえれば『文選』に精通していたと考えられる匡房が、何故吉備大臣による『文選』将来を語るのだろうか。先行研究を瞥見したうえで私見を述べてみたい。

深沢徹氏は、『宝志（野馬台）識』に関する論考の中で、次の二点に言及している。

①実は「野馬台識」伝来の担い手として吉備が撰び取られてきた背景には、匡房の出身母体である大江の学の（起源）をどこに求めるかという、極めてアクチュアルな問題が絡んでいた。大江家は、代々吉備の学統を受け継ぐとする伝承が後に行われるようになるからだ。

②匡房は『江談抄』巻六「周易読様事」で、易经の読みをめぐる江家の「秘事」を語っている。事は『易经』にとどまらない。『文選』の読解——それは「緯書」の知識を必須とした——に関しても、江家と菅家は競合関係にあったはずで、同じく『江談抄』巻六「三史文選師說漸絶事」においては、学の継承をめぐる大江匡衡（匡房の曾祖父）と菅原宣義（菅原文時の孫）の応酬が語られている。

右の要点は、①は、後世に大江の学の起源を吉備大臣とする伝承が行われるようになることから、「野馬台識」伝来の担い手として吉備が撰び取られてきた背景がある、という指摘であり、②は、作品によっては、読解のために緯書の知識も必須とされる『文選』に関して、江家と菅家は競合関係にあった、という指摘である。①の

「大江家は、代々吉備の学統を受け継ぐとする伝承」は、二の末尾で述べたが、②に関して『文選』と「緯書」の知識がどのように結び付くのかという説明を加えておきたい。

匡房は『江談抄』第六（五八）「張車子の富は文選の「思玄賦」を見るべき事」の中で、後漢の天文術数に詳しい文学者、張衡の「思玄賦」に言及している。何を語っているのかというと、丹波殿（匡房の曾祖父の匡衡のこと）の『江吏部集』の「饒越州刺史赴任」中の第三聯の詩句「司馬遷才雖漸進 張車子富未平均」の「張車子富」（この故事は、『搜神記』に「天から銭を借りた夢」という題で出ている話である）を巡っての言談である。

『江談抄』本文では、匡房は「張車子の事は集注文選の「思玄賦」の中に見ゆ。第一に興有る事なり。」と言っている。この「集注文選」については、現存『文選集注』と同一かは未詳とのことである。この「思玄賦」が占いを問題としている事、また張衡の識緯思想に対する態度について、前原あやの氏の論考がある²⁸ので紹介したい。

前原氏は「思玄賦」等の著作の占術表現を検討し、張衡の占術観の分析を行っている。

「思玄賦」の内容は、正道を進もうとする主人公の志が、当時の世に受け入れられない事を嘆き、玄遠の道を求めて四方を経廻り、地下世界から天上界へと到る精神の遍歴を謳うものである。この行動の根拠となるものが、「易」の占いであり、「亀甲占い」であり、「夢占い」である。前原氏は、その文言を考察し、易の占辞と賦の世界観の一体化を指摘する。

また、張衡の讖緯思想に対する態度について、張衡が凶讖禁止の上疏を行った点を分析し、その結果、張衡は讖緯思想全てを否定したのではないとしている。具体的には「緯」(解釈書としての側面)を受け容れ、「讖」(未来予言の面)を批判しているのだという。

この前原氏の論考から判ることは、匡房が精通していると考えられる『文選』収載の作品には、讖緯思想が含まれているということである。匡房が問題とするのは、丹波殿の詩句中の「張車子富」についてであり、それは『集注文選』に見えると言っている。本文の同定の問題はあるにせよ、『集注文選』が、その書名から注釈の集成であるという見当はつく。しかもこの話は、『類聚本系江談抄注²⁹⁾』には、『雲州消息』の記事を根拠として、「思玄賦」については、「江家説があったとみられる」としている。匡房は、文章道の専門家として「張車子の事は注釈書の「思玄賦」にある」と指摘しており、一家をなす説を立てている訳であるから、「思玄賦」の読解が掻い撫であつたとは考えにくい。斯道の権威として「思玄賦」中の故事「張車子富」の知識の他に、この「思玄賦」の骨格たる讖緯の知識も了解のうえで言及しているものと考えられる。

深沢氏は、「宝志(野馬台)讖」請来とその享受に関して、吉備入唐譚を江家の学(起源)を語るだけでなく、陰陽道家の(起源)も同時に語ろうとするテキストであり、菅家に対抗するモノガタリ戦略の現れと捉える。私もこの見解に基づき論を進めていきたい。

私は深沢氏の見解を一步進めて、この説話の各要素を検討し、そこに胚胎した讖だけでなく、緯をも視野に入れた匡房の意図する吉

備説話の意味について明らかにしたいと思う。

なお「讖」と「緯」を併せた「讖緯学」或いは「讖緯説」は、前漢末から後漢にかけて盛んであつた未来予言説であるが、その後隋の煬帝の禁圧により途絶えたとされている³⁰⁾。大江家の基幹の学たる所謂「経書」(儒教)と、「緯書」の補完による完全な学の伝統は、菅家に対する優位性を獲得することになると考えられる。匡房は吉備大臣説話に於いて、『文選』の我国への伝来の史実とは別の、大江家のための「言談」を語つたと言える。

四、唐人との囲碁戦

『文選』の試問に続いて吉備大臣は、唐人との囲碁戦に臨むことになるが、この説話末尾の吉備説話の伝承で、「我が朝の高名はただ吉備大臣に在り。文選・囲碁・野馬台はこの大臣の徳なり」と、我国への囲碁伝来も吉備大臣のお蔭としている点も史実に合わぬ³¹⁾。

我国への囲碁の伝来については、中国または朝鮮から伝来したといわれ、すでに藤原京跡から碁石が出土し、『国家珍宝帳』(七五六年)には聖武天皇愛用の碁石・碁盤が記載され、正倉院には碁局(碁盤のこと)が三つ伝わっている³²⁾。

この吉備入唐説話で、何故匡房は唐人との囲碁の対戦を語っているのだろうか。この点は、『文選』の試問と囲碁とは、どちらも中国からの伝来であり、中国が本家である点が共通している。ここで匡房は、『文選』という難解な詩文総集の読解と同じく、囲碁の

勝負でも本家の唐人を圧倒するように話を仕組んでいるのである。本文では、唐人が、『才は有りとも、芸は必ずしもあらじ。』と言っているが、大臣は「芸」も一流であった。つまり『文選』読解の「才」と「囲碁」勝利の「芸」との「才芸」兼備であった訳である。

このように見てくると、匡房は自らの大江家学の学統に繋がる要素として、吉備大臣が、読むのに難解な『文選』と、貴族的教養としての「囲碁」、そして「野馬台詩」という「識」を我国に齎したので、という大江家独自の説話を展開しているのである。このような匡房の、説話の各要素を、いわば伏線を配したように展開する言説を、どのように捉えるべきなのか。それは、この吉備説話は、神秘性を帯びた「大江家学の始祖への形象化」という一連の操作を含む匡房の志向を籠めて語られているのだ、と捉えられるべきものであろう。

ここまで述べてきたことから、吉備真備という古代でも稀な碩学を、大江家学の始祖に据える意図の重要性が改めて認識されるのであるが、説話の最終段では陰陽師（家）としての吉備大臣の更に超人的な能力が示されることになる。それは「識」（未来記）の解説といるものである。この未来記解説を語る大江匡房の意図はどのようなもののだろうか。

五、野馬台詩の解説

本稿で考察を進める陰陽師（家）としての吉備大臣という点に関

して『職員令』第二九（陰陽寮条）に陰陽師の職掌は「掌らむこと、占筮して地相むこと。」と規定している。しかし、平安朝では、陰陽師（家）は占い（未来予測）を行い、天皇や公家に奉仕するようになり、或る家が専門にこれにあたる、ということになった。これは、陰陽師の職掌の変質であるといえる。匡房が『江談抄』で吉備説話を語る平安朝は、まさにこのような時代であった。よって「識」の解説の能力は陰陽師の重要な資質として期待されたのである。

『文選』、囲碁の勝負と唐人の策略を鬼の援助で乗り切ってきた吉備大臣に課された最後の難問は、僧宝志作の「野馬台詩（識）」という一種の未来記である。この詩を帝王の前で読め、と言われた吉備大臣は、目も眩み文字も見えないという窮地に陥る。その時、大臣は、日本の方角に向かい、本朝の仏神（住吉大明神、長谷寺観音）に祈ったところ、突然蜘蛛が文書の上に降りてきて、その糸を頼りに読み続けると解説することができた。

匡房が吉備説話の最後に語るこの「野馬台詩」伝来の話はこの時代まで遡る事ができるのか。これまでの先行研究の中から、二つの見解を掲げておきたい。

I 後藤昭雄氏の『善家秘記』新出逸文に関する論考³⁶⁾

平安中期の学者三善清行（八四七～九一八）は『善家秘記』という怪異譚を残している。この著作は散佚して伝存せず、『扶桑略記』や『政事要略』に五話を佚文として残すのみであったが、この『善家秘記』逸文を引載する新資料が、後藤氏の紹介した天野山金剛寺

蔵の仮称（佚名諸菩薩感応抄）である。後藤氏によれば、この資料には未知の二話が含まれており、そのうちの二話の内容が、僧宝志作の野馬台詩、或いは識であろうとしている。

次に、この新出逸文の翻刻を引用しておきたい。なお、引用文について、後藤氏は「」内は、残画からの推定としている。

祈念十一面観音読耶馬台

弘仁年中〔撰〕 山有一沙

頂末〔嘗〕 念

梁乃代至

国使其文

宝志

乗白馬過 枚而以朱

韻又 論義理今此沙弥

世守師業亦帰依十一面観音者也 同

この逸文の標題「祈念十一面観音読耶馬台」は、吉備大臣説話との関連という点から重要な意味を持つ。それは、吉備大臣が「野馬台詩（識）」を読まされ窮地に陥った時、救いを求めた本朝の仏神のうち、仏は長谷寺の十一面観世音菩薩であったという事である。『善家秘記』逸文でも、十一面観音に祈念し野馬台詩を読むことができたという説話内容らしく、この点が、『江談抄』の吉備説話と通じる所があり、非常に興味深い資料であると言える。

この『善家秘記』の新出逸文により、日本での「宝誌識」野馬台

詩）の受容の時期は、『善家秘記』の成立年代に拠って考えることになる。川口久雄氏は、その成立は、延喜十六年（九一六）～延喜十八年（九一八）の間との見解を提示し、今野達氏は延喜十年（九一〇）以後との見解を示している。

しかし、この受容の時期は、次に掲げる東野氏の論考により、更に遡れると考えられる。

Ⅱ 東野治之氏の「野馬台識の延暦九年注」に関する論考³⁸⁾

吉備大臣入唐譚の最後の難題「宝誌識」野馬台詩の受容問題については、延暦九年注の問題がある。この未来記が、何時、誰によつて齎され、どのように受容されたのか、という点について、鎌倉時代末の成立とされる『延暦寺護国縁起』(『続群書類従』积家部、『大日本仏教全書』一二六卷所収)に引用される、延暦九年(七九〇)注が注目すべき史料であるが、この注には、院政期以降に盛んに唱えられる思想である、王法仏法相依観が強く打ち出されていることから、この延暦九年という年紀は疑義ありとされていた。

しかし、東野氏の論考では、同注は、天武系から天智系への皇統の交替からさほど降らない時期に、仏家により作られたと見るべきであるとする。東野氏は、宝龜九年(七七八)帰国の法相宗の僧戒明の「十一面観世音菩薩真身」将来の経緯を挙げ、神秘的予言力をもつ宝誌のイメージと、その作と伝える「野馬台識」とが、この頃までに日本に将来されていたとしても何らおかしくないと述べている。東野氏の説から「宝誌識」野馬台詩の受容の最古例として、延暦九年(七九〇)注は、最重要の説であるといえる。

東野氏は、同論文で、同注の本文批判を行い、注の文の復元を試みている。この復元した注の読み下し文のうち、重要点である皇統交替に関わる部分を次に引用する。氏は、「野馬台詩」本文「丹水流尽後／天命在三公」の延暦九年注を次のように読み下している。

延暦九年注に云わく、

丹水流れ尽く（千八女人（倭）帝尽く。又高野女帝崩ずる也。

是に清原の孫尽く、故に天命と曰う。運、近江の孫の大納言に違ぶ、故に三公に在りと云う。）

「高野女帝」は孝謙（称徳）天皇、「清原の孫」は、天武天皇の孫、「近江の孫」は天智天皇の子孫、とそれぞれが意味している、という。これを「皇統譜」に当て嵌めてみれば（数字は、即位の順序である）、この時期が天武系の46孝謙、47淳仁、48称徳天皇から、天智系の49光仁天皇とその皇長子50桓武天皇へと、皇統交替が行われた時代を指している。これは東野氏の言う、この注の作られた時期が「皇統の交替からさほど降らない時期」との論旨を裏付けるものであり、延暦九年（七九〇）の年紀の信頼性を高める内容である。

右の「野馬台詩」受容に関する二氏の見解を検討したうえで、最古の受容事例と考えられる延暦九年注問題について、東野氏の論考に拠って、私見を示せば次のとおりである。

東野氏は、前掲の戒明が在唐中に金陵の宝誌宅を訪れ、志公（宝誌）の「十一面観世音菩薩真身」を将来し、大安寺南塔院中堂で供養したが、この像は後に同寺金堂に移されたいという。この金堂像は資料に拠れば、宝誌の顔面が裂けて中から十一面観音が現れ

るところを表現した像であるという。この事により、「観音の化身であり、神秘的予言力をもつ宝誌のイメージが、遅くともこの時日本に紹介されたことは確実である。」という。

この戒明は、『日華文化交流史』の「遣唐使一覧表」⁽¹⁰⁾にその名が見える。往路は、天平勝宝四年（七五二）出発の藤原清河大使、吉備真備副使の第十二次遣唐使の一行として入唐し、復路は、宝亀九年（七七八）に佐伯今毛人大使、大伴益立副使の第十六次遣唐使の一行として帰国したらしいが、その時代は、吉備真備の左遷に続く遣唐副使任命から薨去の宝亀六年（七七五）に至る晩年にあたる。⁽¹¹⁾東野氏の論考の戒明の入唐と、吉備大臣の晩年が重なり、また、戒明帰国の十二年後が、問題の延暦九年（七九〇）という年紀となる。

右の考察から、政治家、学者として大きな功績をあげた吉備真備の晩年から薨去に至る時代と、「宝誌識」が舶載せられた時代とはまったくかけ離れたものではなく、ほぼ同時代と考えられるものがあり、大唐で多くの学問を習得した吉備大臣と、「宝誌識」（野馬台詩）とが結び付けられ、説話化される素地は十分あったと見なければならぬだろう。そして、『江談抄』の説話で真備が、未来記の一種であるこの「宝誌識」を、本朝の仏神の靈験はあるもの、とにかく読めたという事は、取りも直さず真備が仏神に通じ、未来を讀む能力を持った陰陽道の大家であったのだ、という事を十分に物語るものであろう。

吉備大臣に「野馬台詩（識）」を解読されてしまった唐側は帝王も作者も驚き、大臣を再度楼に幽閉する。ここで大臣は鬼の助けを

得て秘術で唐土の日月を封じ込めてしまう。この場面は吉備大臣説話の結びにあたるが、村山修一氏は、この術は百年を経た双六の筒と、多分天地の式盤（陰陽道で、「陰陽を推し吉凶を占ふに用ふる具」）を用いたであろうと述べている。一方、説話の始まりは、鬼の出現と自分の姿を隠す「隠身の封」（呪術）を使う大臣が描かれていた。この鬼の姿が見えたということ、更に、二で言及した式神の使役は、どちらも陰陽道の方術の奥義とされるものである。「隠身の封」は『今昔物語集』巻二十四「安倍清明、随忠行習道語第十六」で、清明が鬼の出現に対し、忠行や供の者も隠す術として使っているが、この術は陰陽道譚に多い、との指摘がある。齋藤勳氏は、この術を卜占以外の陰陽道の方術（遁甲の術）の例として挙げている。

古典作品ではその構成に首尾照応が見られるものである（例えば『宝物集』）が、ここでは呪法が照応している。「陰陽道」の「術」により首尾照応が図られていることは、吉備大臣説話が深く陰陽道に関わっている、という性格を暗示するものと思われる。

吉備説話は、④の「野馬台詩（讖）」解説に到って、吉備大臣の未来記を読むという超能力を示したものと考えられる。この事は、吉備大臣の始祖としての形象化を志向する叙述であり、それは大臣の学芸と術とを源泉とする大江家学の学統を説くものと考えられる。

六、吉備説話の伝承

「吉備入唐の事」末尾に語られるのは、⑤の説話の伝承の系

譜である。この部分の本文は、次のようなものである。

江帥云はく、「この事、我儘かに委しく書に見る事なしといへども、故孝親朝臣の先祖より語り伝へたる由語られしなり。またその謂れなきにあらず。太略粗書にも見ゆるところ有るか。我が朝の高名はただ吉備大臣に在り。文選・困碁・野馬台はこの大臣の徳なり」と。

この本文での匡房の意図は、長々と語ってきた吉備大臣入唐譚の信憑性であり、客観的な保証を得たいということであろう。匡房自身の語りの最後は、その話の系譜が確かなものであることが求められる。ここで匡房が外祖父である孝親朝臣の名を出している理由は、この伝承の古さという起源だけでなく、他の氏族、つまり貴族社会に於いてもこの伝承が広く知られているのだ、ということが言いたかったからであろう。この最後の段では、匡房は「我が朝の高名は……」と、吉備大臣の大唐での活躍を顕彰し、その遺徳を偲んでいる。

ここで、吉備大臣説話の伝承と、大臣の齎した文物を以てその徳を讃嘆している事は、これまで語った吉備入唐譚が、先述のように、陰陽道は、『易経』や讖緯説と深い関係にあり、また第三節の『文選』の試問で見たように、匡房が、易や讖緯に造詣が深かった事に鑑みれば、匡房自身の学芸等の関心と一致する事を言外に匂わせる趣向と考えられる。そのうえで、大臣の徳を継承した系譜に列なる自身の立場を確認している叙述が窺える。

七、まとめ

以上述べてきた吉備大臣説話の問題は、説話を成り立たせている諸要素を検討した結果、その意味するものは、より明瞭に「大江家学の始祖説話」と位置付けることができよう。

上述の考察から看取できる吉備入唐譚の意味につき、補足しまとめると次のようになる。

この入唐譚で、唐人を圧倒する大活躍をした吉備大臣と、これを援助する鬼との結び付きには、陰陽師と式神のイメージが投影している。初期の陰陽道家ともされる吉備大臣⁵⁰は、後世、江家の始祖とされるようになるが、この事は既に、吉備入唐譚に於いて匡房の言談に散見する匡房自身の陰陽道等の不可思議、怪奇的なものへの傾斜と一致しており、この点で、吉備入唐譚は、限り無く大江家学の始祖説話を志向している⁵¹と見做す事ができる。

深沢徹氏の指摘のように、後世大江の学の起源を吉備大臣とする伝承が行われる事の背景には、吉備大臣が「野馬台詩」伝来の担い手として選び取られてきた経緯がある。『江談抄』でも、緯書の知識を必要とする作品も含む『文選』の話があり、緯書にも造詣の深かった匡房の関心が反映され、それはまた菅家と江家との競合の問題を浮き彫りにする。

匡房の語りの最後には、吉備大臣の「野馬台詩」解説が語られるが、それは陰陽道の大家としての真備の超能力の証明である。この未来記の我国伝来の論考として、東野治之氏の所説で言及される戒

明の帰国時期と、吉備大臣の晩年から薨去に至る時代との重なりは、この入唐譚に繋がる両者の結び付きと、説話化の視点から注目すべきものと考えられる。

この吉備入唐譚で、匡房の語る『文選』試問や囲碁戦の〈才芸〉と「野馬台詩」解説時の〈験力〉、そして入唐譚全部に織り込まれた陰陽道の〈方術〉は、いずれも匡房の異界にまで越境する諸思想の断面であり、同時に、匡房の関心を持つ領域と重なるものである。

吉備入唐譚の随所に見られる匡房の家学の始祖というものへの志向の先には何が読み取れるのだろうか。それはおそらく我が大江家は、儒学（経）とその解釈（緯）との完全なる学統を継受する家なのだ、と宣揚することがこの説話に於ける匡房の意図であったろう。この意図を以て匡房の大江家は、吉備大臣の学問と深く関わるのであり、真備の学に象られた大江家学という言説こそが、吉備大臣入唐譚の意味するものであったと考えられる。

【注】

(1) 後藤昭雄他校注『江談抄 中外抄 富家語』（新日本古典文学大系32、岩波書店、平成九年）

なお、『長谷寺験記』（永井義憲解説、新典社、昭和五十三年）にも類話がある。

(2) 平林盛得「往生伝と江談抄——大江匡房の晩年——」（『國文學解釈と鑑賞』至文堂、昭和四十七年四月）八二～九〇頁。

(3) 「吉備入唐の間の事」末尾に、文選、囲碁、野馬台の三つは、

吉備大臣のおかげで日本に伝えられたとしている。

- (4) 小峯和明『説話の森 天狗・盗賊・異形の道化』(大修館書店、平成三年) 一〇六頁。
- (5) 『大正新脩大藏経圖像』第九卷(大藏出版、昭和五十二年) 一七三頁。
- (6) 岡田健太『阿婆縛抄』研究史稿(『國文學』第91号、関西大学国文学会、平成十九年、一五五―一六五頁)。
- (7) 詫間直樹・高田義人『陰陽道関係史料』(汲古書院、平成十三年) 二五八頁。
- (8) 齋藤英喜『安倍清明』(ミネルヴァ書房、平成十六年) 七頁。
- (9) 注(7) 二八二頁。
- (10) 「式神」については、東京国立博物館所蔵「不動利益縁起絵巻」にその姿が見える。
- (11) 中島悦次校註『宇治拾遺物語』(角川書店、昭和三十五年) 卷第二の八、六〇―六一頁。
「清明藏人少將封ずる事」の粗筋は次のようなものである。
安倍清明が陣に参上した時、藏人少將が内裏に参上するところであったが、烏が少將に糞をしかけた。これを見て式神の仕業と見抜いた清明は、少將にあなたの命は今宵限りと告げ、少將宅で夜通し少將を抱いて護身の法を行った。夜明け方に、相婿が藏人少將を妬んで、陰陽師を仲間にして式神を使って呪い殺そうとした事がわかった。結局この陰陽師は死に、舅は呪詛した相婿を家から追い出してしまった。
- (12) 鈴木一馨『陰陽道呪術と鬼神の世界』(講談社、平成十四年) 一九三―一九五頁。
- (13) 青木和夫他校註『続日本紀二』(新日本古典文学大系13、岩波書店、平成二年) 五八八頁補注一三。
- (14) 堀越光信『扶桑略記』撰者考(『皇學館論叢』第十七卷第六号、皇學館大學人文學會、昭和五十九年十二月)。
- (15) 黑板勝美編輯『扶桑略記』第六(新訂増補國史大系第十二卷、吉川弘文館、平成十五年)。
天平七年乙亥四月辛亥日条「入唐留學生從八位下々道朝臣眞備(中略)留學之間歷十九年。凡所傳學。三史五經。名刑筆術。陰陽曆道。天文漏剋。漢音書道。秘術雜占。一十三道。(以下略)」
- (16) 今井宇三郎『易経上』(新釈漢文大系23、明治書院、昭和六十二年)「解題」。
- (17) 村山修一『日本陰陽道史話』(平凡社、平成十三年) 一〇頁。
- (18) 辰巳正明「文選」の項(小野寛・櫻井満編『上代文学研究事典』おうふう、平成八年) 六二二頁。
- (19) 井上光貞他校註『律令』(日本思想大系3、岩波書店、昭和五十一年) 三〇一頁。
- (20) 竹田晃『文選(文章篇) 下』(新釈漢文大系93、明治書院、平成十三年) 二四三―二六六頁。
- (21) 黑板勝美編輯『本朝文粹・本朝續文粹』卷第十一(新訂増補國史大系第廿九卷下、吉川弘文館、昭和十六年) 一八〇―一八一
江大府卿「辨運命論一首」
- (22) 山田尚子『中国故事受容論考——古代中世日本における継承と展開

- 」(勉誠出版、平成二十二年)「大江匡房「弁運命論」の表
現とその思想」一三一―一七四頁。
- (23) 佐藤道生『平安後期日本漢文学の研究』(笠間書院、平成十五年)「大江匡房の『文選』受容」八三―九五頁。
- (24) 深沢徹「宝誌(野馬台 識)の請来と、その享受——生成される「讖緯」の言説・日本篇——」(『和漢比較文学』第十四号、平成七年一月)五二―六九頁。
- (25) 注(22)の山田氏の論考で取り上げている李康『運命論』の題意の注に、李善が、「春秋元命苞」に曰く、五徳の運は各、其の類に象り……と緯書を典拠としている。〔『六臣注文選』巻五 三「運命論」(中華書局、二〇一二年)九八〇頁に拠る。〕
- (26) 千宝 竹田晃訳『搜神記』(東洋文庫10、平凡社、昭和三十九年)254「天から錢を借りた夢」
- (27) 注(1)二四四頁脚注。
- (28) 前原あやの「張衡と占術」(『関西大学東西学術研究所紀要』45 平成二十四年四月)
- (29) 江談抄研究会(後藤昭雄他共著)『類聚本系江談抄注解』(武蔵野書院、昭和五十八年)三一―八頁。
- (30) 安居香山「讖緯説」の項(日原利国編『中国思想辞典』研文出版、昭和五十九年)二二四―二二五頁。
- 顧頡剛・小倉芳彦訳『中国古代の学術と政治』(大修館書店、昭和五十三年)一九一頁。
- (31) 増川宏一「碁」の項(『日本歴史大事典2』小学館、平成十二年)一頁。
- (32) 米田雄介『正倉院宝物と平安時代―和風化への道』(淡交社、平成十二年)四四―四五頁。
- (33) 注(19)一六四頁。
- (34) 小峯和明『中世日本の予言書——「未来記」を読む』(岩波新書1061、平成十九年)九一―九二頁。
- (35) 後藤昭雄『本朝漢詩文資料論』(勉誠出版、平成二十四年)口絵7・8「金剛寺藏(佚名諸菩薩感應抄)」、本文一八〇―一八二頁。
- (36) 川口久雄『三訂平安朝日本漢文学史の研究』上(明治書院、昭和五十年)二六九頁。
- (37) 今野達「善家秘記と真言伝所引散佚物語——今昔物語集との関連において——」(『日本文学研究資料叢書』、『説話文学』、有精堂、昭和四十七年)二一九―二二〇頁。
- (38) 東野治之「野馬台識の延暦九年注」(大阪大学教養部研究集録(人文・社会科学)第四十二輯、平成六年三月)東野氏は、この論考の最後に、「宝誌信仰が脚光を浴びるのと並行して、野馬台識に即応して付けられたのが、延暦九年注であった可能性は、決して小さくないというべきであろう。」と結んでいる。この点に関して、『南都七大寺の歴史と年表』(太田博太郎、岩波書店、昭和五十四年)八八頁に、平城に於ける大安寺の伽藍と仏像について、東塔の諸仏中に、「壁に梁武帝宝志和尚面談像・獅子形等を描く」とある。この記録からも、東野氏のいう宝誌信仰の盛行と、大安寺と宝志和尚の関わりを窺うことができる。

(39) 注(24) 五二―五三頁。

(40) 木宮泰彦『日華文化交流史』(富山房、昭和三十年)「遣唐使一覽表」七八・七九頁。

(41) 戒明の入唐については、注(40)七八頁に藤原清河大使の第一次遣唐使とあるが、発遣回数に諸説あり、本稿では、東野治之『遣唐使』(岩波新書、平成十九年)及び『遣唐使と唐の美術』(特別展図録、朝日新聞社、平成十七年)掲載の表を基本とする、奈良国立博物館『平城遷都一三〇〇年記念大遣唐使展』の「遣唐使・遣唐使一覽」の回数に拠り、これによれば戒明の入唐は、「第十二次」となる。

(42) 注(40)七九頁。注(41)の理由により、発遣回数は、第十五次が第十六次となる。

(43) 宮田俊彦『吉備真備』(吉川弘文館、昭和六十三年)九四―一〇九頁・二三三頁。

(44) 齋藤勳『王朝時代の陰陽道』(藝林舎、覆刻版昭和五十一年)一四七頁。

(45) 村山修一『日本陰陽道史総説』(塙書房、昭和五十六年)六七頁。

(46) 注(44)一五六頁。

(47) 小峯和明校注『今昔物語集四』(新日本古典文学大系36、岩波書店、平成六年)四一二頁脚注。

(48) 注(44)一五五頁。

(49) 山田昭全・大場朗・森晴彦他編『宝物集』(おうふう、平成七年)一八七頁頭注。『宝物集』では、語りの場の始めの嵯峨清

涼寺(釈迦如来)に対し、結びは吉川本・瑞光寺本・九冊本が「南無大恩教主釈迦尊、後世をたすけたまへ」と首尾が対応。

(50) 注(17)一一六頁。村山氏は、「祇園社と吉備真備」で「平安時代より吉備真備はわが国陰陽道の先駆者として仰がれ、祇園御霊社系統の神社でまつられるほどになっていました。超人化、神秘化された点では、安倍晴明以前のものがあつたのです。」と述べている。この根拠と思われる点として、同書二四〇頁に、「延久二年(一〇七〇)十月十四日の祇園社神殿焼失の際、官使が御神体の模様を調べたとき、蛇毒鬼神、大將軍など宿曜道の神像があつたことが判明しており、平安後期にはすでに陰陽道が牛頭天王の信仰に入っていたことが窺われるのであります。」とも述べている。また、真備と祇園社との関係については、『日本陰陽道史総説』(塙書房、昭和五十六年)一一二頁に、「室町初期に著わされた『峰相記』には、唐朝で陰陽の極意をえて帰った吉備真備が帰朝の途、広峰山の麓に一泊して牛頭天王の夢をみ、ここに勧請してまつた。これがわが国祇園社のはじめであると伝え(以下略)」と述べている。右の記述は真備と陰陽道、そして祇園社の関係を説くものである。更に、真備の陰陽道の術による調伏の話としては、『今昔物語集三』(池上洵一校注、新日本古典文学大系35、岩波書店、平成五年)巻第十一第六に、藤原広継の悪霊に対し、「吉備陰陽ノ道ニ極タリケル人ニテ、陰陽ノ術ヲ以テ我が身ヲ怖レ無ク固メテ、勲ニ提テ誘ケレバ、其霊止マリニケリ。」とある。